２０２４年3月7日（木）

老球の細道７７９号

発見、感動の連続は「どこのドイツだ」④

・・・ユーロバスケットボールツアー紀行〈Ⅱ〉・・・

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

【１２月２７日】ＰＡＲＴ２

いよいよバスケットボールの研修が始まった。スタートはもちろんトスティン。彼とは１０年来の付き合いになるが、彼の講習会を受けるたびにプレーのアイデアとドリルの多様さには驚かせられる。コーチの能力の一つに、いかにドリルの引き出しをたくさん持っているかがある。彼はまさにその最先端を行く。

最初のクリックテーマは「サイズのないビッグマンのポストプレーとウイングマンのプレー」。とてもシンプルですぐに実戦化できるものばかり。キーワードは「ＫＩＳＳ」アプローチ。ブッチュのことではない。「Ｋｅｅｐ　Ｉｔ　Ｓｉｍｐｌｅ　Ｓｔｕｐｉｄ！」（もっと簡単にやれ、バカモン！）。しかし、細かいポイントはきちんと丁寧にプレーすること。「小さいことにこだわれば、大きな差になる」。彼のコーチング哲学である。

昼食を食べて午後のクリニック。今回の目玉の一つ、アントン・ミロフノフのクリニックである。彼は元フィンランドＵ－２０ナショナルチームのヘッドコーチを務め、現在トスティンの後任としてケムニッツ９９ｅｒｓのヘッドコーチを務めている。彼のテーマは「マンツーマンデイフェンスの考え方と工夫」で、今日は講義形式で行った。このクリニックにおいても新しい発見があった。トランジションオフェンスを防ぐためにマークマンにこだわらないピックアップ、ハーフコートデイフェンスにおけるヘルプポジションのＩポジションのみならず、Ｌポジションのコンセプト。さすがプロコーチ、色々なことを考える。

ここで気がついたのは国際的に活躍するプロコーチ達はすべて母国語以外に英語を自由自在に扱えるということである。アントンもトスティン同様英語ペラペラ。アルコールイングリッシュ（お酒を飲んだ時にふざけて話す英語）の私には羨望の的であった。

アントンのクリニック後１６時頃からバスに乗って２時間、隣町のバンベルグに移動。レストランで夕食をとったが、私は再び大きな過ちをしてしまった。夕食の肉を、もの珍しさのために鹿肉をオーダーしてしまった。私は馬年なので鹿とは相性が合うわけがない（馬鹿）。一口食べて鹿と（シカト）すればよかったのに、失礼と思い、かなりの量を食べてしまった。その後の試合会場でとうとう「正露丸」様のお世話になってしまった。

ドイツのプロ・ブンデスリーグのゲームは小さい体育館（河東体育館位）が超満員。熱狂的な地元ファンの元で激しいプレーを繰り広げる。メンバーは両チームとも多国籍軍団。アメリカ国籍の選手もたくさんいる。今やＮＢＡがすべてではなく、ヨーロッパでプレーすることもプロプレーヤーの選択肢の中に含まれている。それにしても応援の騒音は生半可なものではなかった。このような環境の中でも平気でプレーしなければいけないのがプロフェッショナル。タフガイでないと務まらない世界であることを痛感させられた。〈続く〉